

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語の存在文とJackendoffの概念構造
Auther(s)	登田, 龍彦
Citation	ニダバ , 20 : 48 - 57
Issue Date	1991-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047219
Right	
Relation	



英語の存在文と Jackendoff の概念構造*

登 田 龍 彦

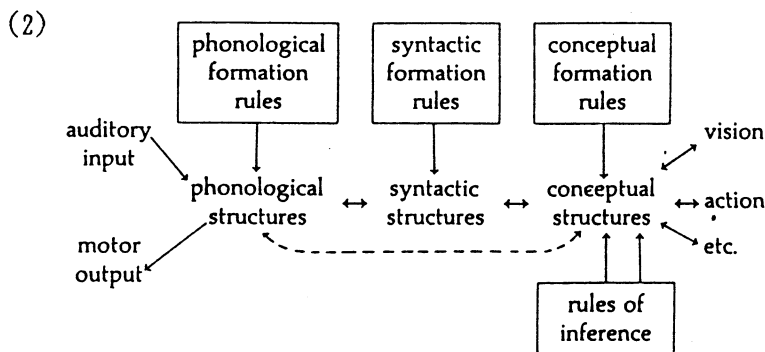
0. はじめに

(1)の文はある物の存在を示す存在文で、「ある会計簿がテーブルの上にある」という知的意味(cognitive meaning)を共有しており、この事実は、変形生成文法の枠組みに於いて、変形規則による関係づけによってもとらえられてきた。¹ 本稿は、(1)に示す英語の存在文の意味がいかん Jackendoff(1990)の概念構造(conceptual structure)で記述されるかを考察することにより、存在文の特性を明らかにすると共に、Jackendoffの概念意味論(conceptual semantics)の妥当性に就いて議論するものである。²

- (1)a. An account book is on the table. (Be存在文)
 b. There is an account book on the table. (There存在文)
 c. On the table is an account book.
 d. On the table there is an account book.
 e. The table has an account book on it. (Have存在文)

1. 概念意味論

Jackendoff(1990)を中心とする概念意味論は、(2)に示すような心的情報構造(mental information structure)の表示としての文法の体系のなかに位置付けられている。



(2)では、音韻、統語、概念の三つの自律的(autonomous)レベルの構造が仮定され、これらはそれぞれ独自の原始的要素(primitives)と原理(principles)を持ち、形成規則(formation rules)によって生成される。概念構造の必須要素は概念構成素(conceptual constituents)

で、それらはThing, Event, State, Action, Place等のいわゆる概念的な品詞とでも呼べる範疇に属する。基本的な形成規則はXバー理論に於ける統語規則に平行的な(3)のようなものである。

$$(3) [Entity] \rightarrow \left[\begin{array}{l} \text{Event/Thing/Place/...} \\ \text{Token/Type} \\ F \langle \langle Entity_1, \langle Entity_2, \langle Entity_3 \rangle \rangle \rangle \rangle \end{array} \right]$$

(3)は、概念構成素は三つの基本的な素性複合体(feature complexes)に分解され、そのうちの一つである下段の関数-項構造 (function-argument structure)素性は規則の回帰性によって可能な概念の無限のクラスを認めることを、示している。具体的な形成規則は(4)に示すものである。

- (4)a. [PLACE] → [Place PLACE-FUNCTION ([THING])]
 b. [PATH] → [Path {TO/FROM/TOWARD/AWAY-FROM/VIA} ([{THING/PLACE})]
 c. [EVENT] → {[Event GO ([THING], [PATH])]/[Event STAY ([THING], [PLACE])]}
 d. [STATE] → {[State BE ([THING], [PLACE])]/[State ORIENT ([THING], [PATH])]/[State EXT ([THING], [PATH])]}
 e. [EVENT] → [Event CAUSE ([{THING/EVENT}], [EVENT])]

三つの言語的レベルは対応規則(corresponding rules)によって連結される。例えば、主要な統語的な句は主要な概念構成素に対応するという事実は(5)のような一般的な対応規則として公式化され、(6)がその具体例である。

(5) XPは[Entity]に対応する。

(6)a. 統語構造: [s[NP John] [VP ran [PP into [NP the room]]]]]

b. 概念構造: [Event GO ([Thing JOHN], [Path TO ([Place IN ([Thing ROOM])]])])]

また、言語的レベルと非言語的領域を結ぶ対応規則も存在し、聴覚体系によって与えられる音響分析の音韻構造への写像、音韻構造を発声器官への発動命令への写像、視覚や行為にかかわる心的表示の形式と概念構造間の写像などが行われる。更に、概念構造は推論規則(rules of inference)によって別の概念構造に写像される。この推論規則には論理的推論の規則だけでなく、語用論(pragmatics)の規則も含まれている。例えば、(7)のような推論規則は、(8a)のbe文は(8b)のgo文の終点での状態を表現するという事実を説明する。

(7) At the termination of [Event GO ([X], [Path TO ([Y])])], it is the case that [State BE ([X], [Place AT ([Y])])].

(8)a. The bird is in the tree.

b. The bird went from the ground to the tree.

議論上特に注目すべきことは、語用論的特性も文の論理的特性と同じ心的表示のレベル即ち概念構造で表わされる、と仮定されていることである。

2. 虚辞のthere

Jackendoff(1990:22)では(9)に示すように、

- (9) Each major syntactic constituent of a sentence (excluding contentless constituents such as epenthetic *it* and *there*) maps into a conceptual constituent in the meaning of the sentence.

挿入的で内容の無いといわれる虚辞(expletive)の*there*は概念構造に於いては表現されないため、(1)の(a)-(d)は(10)のような同じ概念構造を持つと思われる。³

- (10) [state BE (X, [place ON (Y)])] (X=account book; Y=table)

また、(1e)のHave存在文は、安井(1989)も指摘するように、定性制約(the definiteness restriction)に関してThere存在文と同様の振る舞いを示すので((11)-(13)参照)、その概念構造は基本的に(10)であるように思われる。

- (11)a. New York has many high-rise buildings in it.
b. *New York has my house in it. --Rando & Napoli(1978)
- (12)a. There's the strangest bird in that cage.
b. He has the strangest bird in that cage.
- (13)a. What's worth visiting here? → There's the park, a very nice restaurant, and library.
b. What's worth visiting here? → We have the park, a very nice restaurant, and library. --安井(1989)

問題は、(1)の文が同じ概念構造を持つとすれば、意味論的及び語用論的なそれらの違いを概念構造が予測できるのかどうかということである。

第一に、(1)の(c)と(d)の*there*の有無に就いての語用論的相違は(14)から明らかである。

- (14)a. *As I recall, across the street is a grocery.
b. As I recall, across the street there's a grocery.
c. As you can see, across the street is a grocery.
d. *I can see that across the street is a grocery.
e. I can see that across the street there's a grocery. --Bolinger(1977:93)

「通りの向こう側に雑貨屋がある」という状況が眼前にあれば*there*は必要でなく、心の中に差し出す場合は*there*が必要になる。また、前方に向けて開いた手のうえに鉛筆をのせ、背中の後ろに回した握りこぶしの中には消しゴムを握っていたとすれば、(15)のような表現になる(Bolinger(1977:95)参照)。

- (15) In my right hand is a pencil, and in my left there's an eraser.

つまり、情景あるいは行為が眼前に生き生きと映し出されれば出されるほど*there*の必要性は無くなるということである。⁴

第二に、(1a)と(1b)の両存在文の決定的な違いとして、前者はその主語が有形の実体(具体的実体)を指さなければならない具象的な知覚レベルの記述様式であるのに対して、後者は

その論理上の主語にはそのような制約は課されず抽象的な認識レベルである(中右(1990)参照)。

- (16)a. Some snow is on the roof.
b. Many holes were in the wood.
c. *Some ridiculous laws are in this state.
d. *Space is in the room.
e. *An unpleasant smell is still in my car.
- (17)a. There is (some) snow on the roof.
b. There are (many) holes in the wood.
c. There are (some) ridiculous laws in the state.
d. There is space in the room.
e. There is still an unpleasant smell in my car. --中右(1990)

このようにthereの有無が文の文法性/容認性を決定し、事象の認識とその言語表現の関係にあって重要な機能を果たしていると思われる。が、概念構造でthereが表現されないとすれば、thereの有無に大きくかわる意味の問題に対してJackendoffの概念意味論は何も言うことができず記述的妥当性を欠くことになる。⁵

3. Have存在文

Have存在文の基本的な特徴として、(i)(18b)と同義である(18a)には主語のthe boxと前置詞の目的語のitは同じ主題役割(thematic role, 以下 θ =(theta)-役割と略す)を持つため、「項(argument)はそれぞれ一つのそしてただ一つの θ -役割を持ち、また θ -役割はそれぞれ一つのそしてただ一つの項に付与される」というChomsky(1981:36)の θ -基準に抵触する点と、(ii)前置詞の目的語は、wh化を許さず主語と同一指示であるのに再帰代名詞でなくて代名詞である点を挙げることができる(Jackendoff(1987, 1990)参照)。

- (18)a. The box has books in it(*self).
b. There are books in the box.
c. *What does the box has books in?

興味深いことには、Jackendoffの分析では、主題役割の θ -基準の違反の問題は生じない。何故なら、概念意味論で主題関係が問題になるのは統語構造でなく概念構造であり、その概念構造では場所を表す概念範疇は一つしかないと考えられるからである。問題は、主語の θ -役割と場所語句の生起に課せられる条件である。

3.1 第一に、統語論的項と意味論的項の間に一定の関係があるというJackendoffの連結理論(linking theory)にとって動詞Haveは最大の反例である。何故なら、英語の統語的階層では、主語は目的語よりも高く、(19)の主題階層(thematic hierarchy)に於いて高位の θ -役割を持たねばならないが、haveの主語は所有の場所(a possessional location)で目的語は主題(theme)であるからである。

(19) 主題階層:

- a. [AFF (X*, <Y>)] (Actor)
- b. [AFF (<X>, Y*)] (Patient (AFF⁻) or Beneficiary (AFF⁺))
- c. [GO/BE/STAY/EXT/ORIENT/MOVE/CONF (X*, <Y>)] (Theme)
- c'. [Event/State F (X*, <Y>)]
- d. [Path/Place F (X*)] (Location, Source, Goal)

(*は問題となる構成素を示している。)

この事実に対して、Jackendoffは二つの解決法に触れているが、いずれも確信が持てないとして未解決のままである。一つは、何かを所有することは、ある意味で、それを制御することである(“having something is, in a sense, controlling it”)とするFalk(ms.)とPinker(1989)の示唆を援用すれば、主語はある種の状態的行為者(stative Actor)であり目的語は状態的受動者(stative Patient)となって、主題階層の順序を回復する、というものである。もう一つは、haveはreceiveの状態的側面(a stative version)と考えられて、主語は状態的受益者(Beneficiary)となり階層に従う、というものである。

(20)a. a stative Actor/Location -- a stative Patient/Theme

b. Beneficiary/Location -- Theme (下線は優位な(dominant)θ-roleを示す)

二つの解決法に共通していることは、「主題層」(thematic tier)でなくて、「行為層」(action tier)を踏まえたものであり、これによって主題階層を回復できるならJackendoffの二つの「層」の仮定に対して動機づけを与えることになる。しかし、本稿では、(20)の両方とも難点のあることを指摘したい。

まず、主語と目的語が状態的であるにせよActorとPatientの関係であれば、受動文の可能性を予測するが、Have存在文には一般的には対応する受動文が存在しない点。

次に、前置詞の目的語が再帰代名詞でなくて代名詞であるという点。Quirk(1985:360, note [a])も(21)を挙げて述べているように、場所語句の代名詞は他の代名詞との対立もなく強調する必要もない。

(21) *Have you any money on me?

意味論的/機能的説明に絞って言えば、代名詞と再帰代名詞の分布のより一般的な説明としてKuno(1987:67)の制約(22)を挙げることができる。

(22) Semantic Constraint on Reflexives: Reflexive pronouns are used in English if and only if they are the direct recipient or targets of the actions represented by the sentences.

(23)a. John wrote to Mary about {himself/*him}.

b. John referred Mary to {himself/*him}.

c. John compared Bill with {himself/*him}.

d. John has passion in {*himself/him}

e. John has many friends around (*himself/him). --Kuno(1987)

(22)は、再帰代名詞が英語で使用されるのはそれらが文によって表される行為の直接的な受け手ないし目標である場合そしてその場合に限る、というものである((23)参照)。主語が受益者(Beneficiary)であれば前置詞の目的語もそうで、行為の受け手(recipient)あるいは目標(target)であるため再帰代名詞を誤って予測してしまう。

3.2 第二に、場所語句の生起はJackendoffに対して重要な問題を提起する。Erdmann(1976: 174-8)はThere存在文とHave存在文に見られる(24)―(27)のような興味深いパラダイムを挙げている。

- (24)a. There is someone in the garden.
b. There are footsteps on the stairs.
c. *The garden has someone (in it).
d. *The stairs have footsteps (on them).

- (25)a. There are stars in the morning sky.
b. There is snow on the ground.
c. The morning sky has stars *(in it).
d. The ground has snow *(on it).

- (26)a. There is a rent in the mattress.
b. There is a label on the bottle.
c. The mattress has a rent (in it).
d. The bottle has a label (on it).

- (27)a. There are many taxis in London.
b. There is a dining car on the train.
c. London has many taxis (*in it).
d. The train has a dining car (*on it).

(*X)はXが省略されると非文法的であり、(*X)はXが現れると非文法的であること(を示す。)

また、(28)が示すように、There存在文は意味上の主語の一時的特性でなく永続的特性を表現するのに適していない。

- (28)a. She has blue eyes.
b. *There are blue eyes on her.

以上のデータは(29)のように説明できるように思われる。

(29) HAVE存在文

THERE存在文

OK

OK

永続的特性 ←

→ 一時的状態

不生起 随意的 ← Have存在文の場所語句 → 義務的

もしhaveの主語の永続的特性が表現されるのであれば、場所語句は不要であり、反対に主語の一時的状態を表す場合は場所語句が必要となる。つまり、一見余剰的に見える場所語句は目的語の指示物が主語の指示物に存在しているのは一時的なものであることを示すという重要な働きをしているように考えられる。⁹Have存在文とThere存在文はそれぞれ、(意味上の)主語の永続的特性と一時的特性を表現する両極に分かれており、その間は連続体となっていると思われる。但し、Have存在文はBe存在文よりもThere存在文に近いことが、(30)と(31)に示すデータと(16)と(17)のデータの比較から窺える。

(30)a. The roof has (some) snow on it.

b. The wood had (some/many) holes in it.

c. This state has some ridiculous laws (*in it).

d. *The room has space in it.

e. My car still has an unpleasant smell in it.

(31)a. There's not enough space in the cupboard for all my clothes.

b. The cupboard doesn't have enough space {in it for all clothes/for all my clothes in it}.

c. *Enough space is not in the cupboard for all my clothes.

c' *Enough space for all my clothes is not in the cupboard.

しかし、両構文の場所語句に就いて統語論的な違いが見られ、There存在文の場所語句は文頭の位置に前置可能であるが、場所語句がHave存在文の場合は不可能である。

(32)a. There is a fly in the mustard.

b. In the mustard there is a fly.

c. The mustard has a fly in it.

d. *In it the mustard has a fly.

e. *In the mustard it has a fly.

また、動詞句削除(VP Deletion)に於いてHave存在文は場所語句を残せない。

(33) The mustard has a fly in it, and this soup {does/*does in it}, too.

この違いは、レキシコンの動詞beとhaveの厳密下位範疇化に於ける統語論的違いとして、即ちHave存在文の前置詞句はVPによって支配されるのに対して、There存在文の前置詞句はSによって支配されると記述できるかもしれない。

Jackendoffでは、動詞の下位範疇化は概念的項(conceptual argument)の構造から予測し、項の統語的位置は連結理論(linking theory)によって説明されるとし、下位範疇化の記述を無くす方向にある。しかし、例外として義務的な付加詞(adjunct)は動詞の下位範疇化の中に義務的な構成素として含むが、付加詞を語彙的な概念構造と指標によって結び付けないことによってその資格を示す方策が取られている。例えば、(34)のridの場合では、目的語の名詞句は項(argument)であるので連結規則によって概念構造と結び付くのに対して、前

置詞の目的語は付加詞固有の規則であるOf-Theme Adjunctの規則によって概念構造の主題(Theme)の位置に対応づけられるとJackendoffは主張している。⁷

(34)a. Bill rid the room *(of insects). (cf. Bill emptied the room (of insects).)

b.
$$\left[\begin{array}{l} \text{rid} \\ \text{V} \\ \text{NP [PP of NP]} \\ \text{[CAUSE ([]}_A, \text{[INCH [NOT BE ([]}, \text{[IN}_A \text{ []}_A\text{)])}]] \end{array} \right]$$

Have存在文の付加詞規則では、前置詞の目的語が概念構造の所格(Location)の位置に対応づけられる場合、所格にはhaveの主語の名詞句が連結規則によって対応づけられるので、指示するものが全く異なるものではないという自然な条件が課せられる。そうすれば、例えば(21)の例文はyouとmeが所格に於いて一つに融合(fusion)できないから非文法的になるという説明を与えることができると思われる。しかし、Have存在文の付加詞の生起には、(24)–(27)のデータが示すように四つの可能性がある。問題は、この生起に課される条件が、ridとは違いhaveそれ自体の意味でなくて主語と目的語の意味論的及び語用論的關係によって決定される点である。従って、この事実は概念構造だけでは説明できないように思われる。

3.3 本稿では、Have存在文を主題階層の例外として扱い、そのHave存在文の有標性、つまり、(i)前置詞の目的語に再帰代名詞でなくて単純な代名詞が現れる点、(ii)付加詞の前置詞句の存否が動詞の固有の特徴によってでなく動詞を含めた主語と目的語の結合的意味及び語用論的に決定されるという点、(iii)安井(1989:117)の主張する『「動詞+目的語」という構文をとっているというのは、いわば、文法的なメタファーである』という点、などを予測できるので、連結理論の動機づけになると主張したい。

4. 結語

本稿では以下のことを主張した。

(i) Jackendoff(1990)の文法の構成のままでは、虚辞のThereの機能を概念構造に組み込む必要が生じる点。

(ii) Have存在文の場所語句の存否は主語名詞句と目的語名詞句の間に見られる意味論的及び語用論的關係によって決定されるため、その生起を概念構造ではとらえられない点。

(iii) Have存在文が連結理論の最大の反例であることは、その文の例外的特徴の一つを表しているに過ぎず、連結理論の記述的妥当性を損ねるものではない点。

結論としては、Jackendoff(1990)の概念意味論は、語用論を推論規則に組み込むと仮定されてはいるが、推論規則が概念構造自体の吟味に限定されている限り(p. 14)、Chomskyの統語論と同様に文文法に属するので、本稿で観察した存在文の語用論的側面は概念意味論の考察対象外と言わざるを得ない。

注

*本稿は日本英文学会第43回九州支部大会(於 佐賀女子短期大学 平成2年10月28日)のシンポジウム「意味と概念構造をめぐって」に於ける口頭発表を加筆・修正したものである。発表の機会を与えてくださった司会の稲田俊明氏並びに講師の大橋浩氏、西岡宣明氏との議論は有益であった。ここに記して感謝したい。

1) 例えば、(1a)から(1b)への“*There insertion*”, Milsark(1974)の“*NP Downgrading*”と“*Trace Removal*”, Kuno(1971)の(1c)から(1b)への“*Locative-postposing*”, Ross(1967, 1986)の(1b)から(1e)への“*There-Replacement*”等がある。尚、議論上()内の名称を使用する。

2) (1a)は書き言葉及び話し言葉では非常に希であるが、ある一定の文脈(例えば(i)とか舞台のト書き)では見られる(Breivik(1981)参照)。

i) We are looking at an extraordinary picture painted by X. A middle-aged man and three boys are seated on chairs or stools at a spindly square table. An account book is on the table. (Underlines mine)

3) 但し、It-thatの外置構文の場合(Jackendoff(1990:278)参照)と同様に、(1b)のan account bookを虚辞のthereの位置に対応づける(i)のような解釈規則が必要である。

i) [s... [NP there]¹ v... NP_k...] may correspond to [F(... [[]_k] v...)].

4) 同様の主張は、Breivik(1981)によって“the Visual Impact Constraint”として述べられ、倒置文だけでなく(1a)にも適用される(注(2)を参照)。

5) 本稿では暫定的に以下のような概念構造を仮定しておく。

i) Be存在文: [State BE_{Ex} ([Thing (CONCRETE)_i, [Place])]

ii) There存在文: [Event INCH ([State BE_{Ex} ([Thing]_i, [Place])))]

iii) Have存在文: [State BE_{Ex} ([Thing]_i, [Place]_i)]

Be存在文の主語に課せられる「有形の具体的実体」という選択制限は、Jackendoffの主張に従い、動詞の挿入に課せられる文脈上の条件でなく、動詞の項構造に統合して主題(Theme)にCONCRETEという意味標識(semantic marker)を付ければ、There存在文との相違を記述できると思われる。There存在文の場合、thereを項としてでなく関数(function)として、つまり「thereはあるものがあるところに存在するという状態を意識にのぼらせる」という起動的役割を示すInch(ocative)として、概念構造に表現できる。また、BE関数に意味の場の素性(semantic field feature)としてEx(istential)を付けることによって、Ident(ification)の叙述文iv)と存在文を区別できる。

iv) The account book is on the table.

6) 従って、(11a)は、私のインフォーマントも指摘するように、場所語句のin itが無い方が容認性が高い。

7) Of-Theme Adjunct Ruleとしてi)が仮定されている。

i) If V corresponds to [... NOT BE ([X], ...) ...], with [X] unindexed, and NP

corresponds to [Y], then [s...[_{VP} V...[_{PP} of NP]...]...] may correspond to [...NOT BE ([\tilde{X}],...)]..., where [\tilde{X}] is distinct from [X].

--Jackendoff(1990:168)

参考文献

- Bolinger, Dwight. 1977. Meaning and form. London: Longman.
- Breivik, Levi E. 1981. On the interpretation of existential there. *Language*. 57. 1-25.
- Cattell, Ray. 1984. Composite predicates in English. *Syntax and semantics* 17, New York: Academic Press.
- Chomsky, Noam. 1981. Lectures on government and binding. Dordrecht: Foris.
- Erdmann, Peter. 1976. There sentences in English: A relational study based on a corpus of written texts. Munich: Tuduv.
- Jackendoff, Ray. 1987. The status of thematic relations in linguistic theory. *Linguistic Inquiry*. 18. 369-411.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge: MIT Press.
- Kuno, Susumu. 1987. *Functional syntax*. Chicago: Chicago Univ. Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: Chicago Univ. Press.
- Milsark, Gary Lee. 1974. *Existential sentences in English*. Doctoral dissertation, MIT.
- Nakau, Minoru. 1990. Sonzai no Ninchibunpo. in Tsuchida, et al. (eds.) *Bunpo to imi no aida*. Tokyo: Kuroshioshuppan. 161-179.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Rando, Emily, and Napoli, Donna J. 1978. Definites in There-sentences. *Language*. 54. 300-13.
- Ross, John R. 1986. *Infinite syntax!*. Norwood: Ablex.
- Yasui, Minoru. 1989. *Eibunpo o arau*. Tokyo: Kenkyusha.